

植物病理学という学問に出会って

酪農学園大学農食環境学群循環農学類
植物病理学研究室 准教授

薦田(萩原)優香 氏 (高校43期)



帯広畜産大学畜産環境科学科卒業
Oregon State Univ., Dept. of Botany and Plant Pathology 修了、Master of Science 取得
北海道大学大学院農学研究科修了、博士号取得
科学技術振興機構(CREST)、農業生物資源研究所、北海道大学、東京大学など、複数
機関にて研究員
2016年に酪農学園大学に着任

新型コロナウイルスの大流行により、PCRという言葉も一般的になりました。ウイルス病は私たちにとって身近な存在ですが、植物にもウイルス病があることを知らない人は結構多いようです。私は現在、北海道江別市(札幌市の隣)にある酪農学園大学という小さな私立大学で、植物ウイルス病を中心に、植物の伝染病について研究しています。

【立高～学生時代】

立高時代、全く目立たない存在だったと自覚しています。毎日バレーボール部の仲間と過ごしていて、練習前には体育館床の鳩フン掃除が必須だったこと、秋に外コートの落ち葉で焼き芋したことなどが懐かしく思い出されます。勉強せずに高校生活を送ってしまったため大学には浪人してから入るつもりでしたが、憧れの北海道に一人、記念受験に行ったことがその後の私の人生を大きく変えたように思います。



オレゴンに留学中、
ラボメンバーと

大学3年の時に植物病の研究に初めて触れ、やがてアメリカで研究したいと考えるようになりました。悩みながらも就職活動を中断し、卒業後すぐにオレゴン州立大の大学院を目指して渡米しました。オレゴン州立大では植物ウイルス学の研究室に入り、そこでウイルスの面白さや植物の不思議さを知ることになりました。海外での大学院生活は大変な部分も当然ありましたが、それ以上に貴重な経験や出会いがあり、充実した4年間でした。

【研究者として】

博士号を取得した後、十数年間[※]ポスドクとして研究を続けました。このポスドクという身分は、数年で雇用が終わるためとても不安定です。女性の場合は特に、結婚・出産・育児などのライフイベントが大きく影響します。私は研究を続けるため、乳幼児を連れてつづば、北海道、東京、また北海道と、大学や研究所を転々と移動しました。不安定な身分での研究活動と育児の両立はまさに綱渡り状態でした。現在、大学教員として研究できる状況にあるのは、間違いなく周りの方々に恵まれ、色々な場面で手を差し伸べていただいたからであり、とても感謝しています。 **※ポスドク:ポストドクターの略で、任期付きの研究職ポジション**



氷点下の酪農学園大学構内で、
研究室の学生達と



黒穂病に罹ったスイートコーンを手に持ち、
学生に解説中

少しか研究の話をする。動物が病原体に対する防御機構を持つことは知っている人も多いと思います。実は、植物も感染防御機構をもっていて、常に周囲の病原体と戦っています。現在私は、研究室に所属する学生達と共に、病原体と植物との攻防戦を解き明かすべく研究を進めています。世界では、植物伝染病によって毎年8億人分の食糧が失われていると言われています。病原体はどのように感染症を引き起こすのか、植物はどのようにそれに対抗しているのか、それらメカニズムを明らかにしていくことで、将来の農業にわずかにでも貢献できればと思っています。ここ酪農学園大学には農業や食品に直接関わる仕事に就く学生が多く、「現場」と「研究」とをつなぐことの重要性を考えさせられる日々でもあります。

日本の食を支える北海道農業や北海道の豊かな自然に興味がありましたら、ぜひ一度、遊びにいらしてください。